

2011年9月20日（火）14:00-15:40

パネル・ディスカッション

東日本復興の障害と可能性―「東北スカイビレッジ構想」を題材に

迫 慶一郎 SAKO 建築設計工社代表取締役

涌井 史郎 東京都市大学教授

谷家 衛 あすかアセットマネジメント代表取締役

西村 裕二 アクセンチュア経営コンサルティング本部統括本部長

楠木 建（モデレーター） 一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授

東日本大震災から半年が経ったが、復興の全体像は未だに見えてこないのが現状である。復興ビジョンを目に見える形で示すために、具体案として「スカイビレッジ構想」を題材にパネル・ディスカッションが行われた。

まず「スカイビレッジ構想」について発案者の迫氏より概要が説明された。スカイビレッジ構想とは、これまで別の領域と考えられてきた土木と建築の融合による新しい街作りの提案である。高さ 20 m、東京ドームほどの大きさの人工地盤による卵形の台地であり、仙台平野など低地部にこの人工島を築き、その上に集落を形成、島の内部空間も活用するというものである。複数の人工島をクラスタ型に配置し、核となる中心島には役所や小中学校、病院などの公共施設を、周囲には集落ごとに住宅島を配置するコンパクトシティの構想である。これまでの防潮堤による「線」での防災から、水を受け流す「点」での防災を可能にした。この構想には大きく分けて3つの特徴がある。

第一に、安全安心に地元に住み続けられることがあげられる。現在考えられている高台移住では家から田畑や海岸への移動距離が長くなるが、スカイビレッジでは移住の必要が無く、海を望みつつ地元に住み続けたい現地の思いにも応えられる。また、人工島への帰宅により避難が完了することになり、これまでのように高台や特定施設への避難が不要になる。

第二に、トータルでの建設コストの低減が可能である。人工島は一島あたり 210 億円と見積もられるが、既存のインフラを活用しながら人工島を配置することで、高台に新規にインフラ構築するコストで人工島の建設費用を賄える。巨大な防潮堤を延々と築く必要も

なく、通勤コストも下げられる。また、産業用地も新設することなく、人工島の内部空間を活用できる。

第三に、コミュニティの再生と雇用の創出がある。地域の規模をコンパクトにすることで老人や子供が交流しやすいコミュニティが実現できる。離散型集落からコンパクトシティーへの議論は古くよりあったが、今が実行に移すよい機会ではないだろうか。また、内部空間は、水耕栽培所や水産加工場、半導体工場あるいは免税店特区など、その地理的、環境的特性を活かし様々な用途に使うことが可能で、雇用の創出が見込まれる。

これらの特徴を持つスカイビレッジは目に見える復興のシンボルとなり、観光拠点としても活用できる。復興のロールモデルとして国内外問わずアピールできる存在となれば理想的だ。

以上迫氏の提案を受けて、楠木氏による進行のもと、様々な観点からパネル・ディスカッションが行われた。

涌井氏は複雑系の観点から、スカイビレッジ構想は本質をついた提案であり、東北に昔からある「日和山」にも通じる伝統的かつイノベーティブな提案だとした。土木と建築の融合に加え、造園（砂から農地を守るために松林や低山林を築いてきたノウハウ）の要素も加えられるとよいだろう。古来より日本人は小単位・自己完結のクラスター型の生活空間を築き、自然と共生してきた。スカイビレッジは、過去を踏襲しつつエネルギー・情報・アクセス・エコロジーの4つをネットワークさせたライフスタイルのモデルプランである。また、現在の日本においてはバイオミミックなど有望な技術があるが、自然の知恵を工業化するといった知的イノベーションも加味されるとより魅力的だ。特区として既存の枠組みにとらわれない大胆な構想ができれば発展性は非常に高い。

西村氏は現地での活動に基づいた視点から、本構想が住民目線であることに触れ、小さなコンパクトシティーが繋がることで広がる可能性に期待を示した。住民の雇用創出に関しては、ルイ・ヴィトンと漆のコラボレーションが好評だったように、各地域に根ざした伝統工芸と世界ブランドを掛け合わせることも大きな可能性を秘めている。また、東北各地域の多様な自然エネルギーを統合する発電グリッドを形成できればエネルギー的にも有用となる。スマートシティーは建設費が大きく経済危機の影響を受け頓挫しているが、スカイビレッジは比較的低価格だし、不動産価値の向上可能性や商品としての知財価値もあり、リスクテイクしやすい。ネットワーク化されたスカイビレッジが地域としてどのよう

な価値を作るのか、構想を総合的に考え、トータルとしての財務計画を作成することが求められる。

谷家氏は投資の観点から、スカイビレッジがこれからどんなキャッシュフローを生むのか、それがもたらす価値を分かりやすく示すことが必要であり、いかに個性を高めるかが課題だと指摘した。個性があれば、その価値を求めて人が集まってきて、住む人が経済活動を展開する。他のスマートシティは全体的統一感がないが、スカイビレッジは建築家がまとめることで魅力的なものに仕上がっている。世界の建築家が参加するコンペをするなど、建築家を巻き込んで、ダイヤモンドを創り出すことが大切。ドバイでは世界地図型の島を富裕者に販売しているように、災害復興のシンボルとして島の命名権を投資の対象とすることも考えられる。スカイビレッジは自然との共生を目指すという点でとても日本的で、被災した街をどのように再生したかをストーリーとして語れるような構想は個性的でありアピールポイントになり得る。とてももっと面白い場所になる可能性は十分にある。

未だに目に見えるビジョンが出てこない中、スカイビレッジは建設的な議論を進められる構想の好例である、とモデレーターの楠木氏は最後に指摘した。自治体の復興会議はあるものの、復興全体がビジョンとして示されていない中、建築家の視点から人々の生活をイメージした統一感のある構想がようやく一つ見えてきた。今後出てくるであろう一つ一つの構想を意識して見て、自分であれば何ができるかを考えていくことが重要だ。(了)